

2編の「ポヌンカヨ」物語にみられるストーリー展開と交差対句： 浅井タケを話者とする樺太アイヌ口承テキストを題材として

大喜多 紀明

アブストラクト

筆者の前稿（大喜多 2013a : 95-106）では、上田トシを話者とする、北海道アイヌの口承文芸である、ウウェベケレ「カラスに育てられた男の物語」をテキストとして、そこに見出されるストーリー展開と交差対句の出現領域に関する比較対照を行った。その結果、物語が編成される際に、ストーリー展開に関する因子（ α ）と交差対句を構成しようとする因子（ β ）が、互いに独立して作用することを示唆する知見が得られた。

前稿の知見に基づき、本稿では、樺太アイヌである浅井タケを話者とする樺太アイヌの口承テキストを題材として、ストーリー展開と交差対句との関係についての調査を行った。本稿で得られた知見は、浅井の口承テキストの場合も、口承の構成に対して（ α ）と（ β ）が独立して作用するというものである。また、本稿の目的は、北海道アイヌと樺太アイヌの心性における関連性を検討するところにもある。

キーワード：樺太アイヌ、トゥイタ_h、心性、交差対句、ストーリー

1. はじめに

本稿の目的は、樺太アイヌである浅井タケを話者とする既に採録された一連のトゥイタ_hの中でも、「ポヌンカヨ」と題された2編のテキストに焦点を絞り、話型（ストーリー展開）および交差対句の構成を分析することで得られた事柄を対比することによって、物語の構成をもたらしした話者の心性を探索するところを主眼としている。

樺太アイヌ語は、かつて、南樺太で使用されていたアイヌ語の方言であるのだが、最後の話者とされる浅井タケの死により、「話者が絶えた言語」となった（村崎 2012 : 3-16）。この浅井は、本稿における口承テキストの話者である。ここで、北海道アイヌの場合は資料的蓄積が多いのだが、それに較べると、樺太アイヌ語に関する言語資料の絶対量は少ない。取り分け、樺太アイヌ語の音声資料に関しては、以前から、ピウスツキ（村崎 2013 : 55-60）や伴野（伴野 1991 : 84-86）によるものなどが知られていたのだが、資料数がかなり限定されており、録音状態は必ずしも良いとは言えない。浅井を話者とする言語音声資料の収集を行った村崎は、浅井のテキストの採録が樺太アイヌの口承研究にもたらしたに関して『浅井タケ昔話全集 I, II』（村崎 2009）（以下、本稿では「全集」と呼ぶ。）の中で次のように述べている。

樺太アイヌの口承文芸は、根源的には北海道アイヌのそれと共通であるが、そのジャンル、語り方、歌い方、形式などの特徴については、北海道の場合とかなり異なっている点が多くある。この相違点については、これまでほとんど明らかにされていなかったが、浅井タケさんの膨大な音声資料と情報によってその姿がかなり明らかになった。

浅井を話者とする一連の採録資料は、それまで採録されてきた資料に比べて分量が多く、「全集」には、合計54編の、浅井を話者とするトゥイタ_hが収録されている。村崎によれば、浅井の「音声資料」と浅井がもたらした「情報」により、北海道アイヌと樺太アイヌの口承文芸における相違点がかかり明らかになったという（村崎 2009）。なお、トゥイタ_hは、樺太アイヌの口承文芸における一ジャンルである。浅井から採録された資料は、録音状態に関しても、従来のものに比べて優っている。本稿では、「全集」に収録されたトゥイタ_hの中でも、「ポヌンカヨ - 86 (*ponunkayoh-86*)」（以下、本稿では「ポヌンカヨ①」と呼ぶ。）および「ポヌンカヨ - 88 (*ponunkayoh-88*)」（以下、本稿では「ポヌンカヨ②」と呼ぶ。）と題された2編をテキストとしている。ここで、本稿でテキストとした「ポヌンカヨ①」と「ポヌンカヨ②」は、採録日時は異なるのだが、「同じ話」であるとしても差し支えない。

ところで、「全集」を記録した村崎は、採録日時が異なる2編の「ポヌンカヨ」物語を区別するために、「ポヌンカヨ」

という呼称に「採録年」を添えている。言い換えれば、村崎は、2編の「ポヌンカヨ」を、口演日時の異なる「同じ話」として位置付けている。本稿では、同じ呼称で呼ばれ、かつ、口演日時で区別された「同じ話」を「同話」と呼ぶことにする。「全集」に掲載されたトゥイタハの中でも同話を有するものには「ポヌンカヨ」以外に、「さらわれた娘」、「頭蓋骨」、「ウンカヨお化け」、「箱流しの話」、「イムー女」、「フキとりの話」、「糸つむぎ」、「いびきの話」、「腫れ物」、「スキー」がある。それぞれの同話どうしを比較した場合、程度の差こそあるが、そこには差異が見出される。これに関しては、トゥイタハが口承文芸であるために生じるものである。むしろ、初録時と再録時の話に、ある程度の食い違いが生じると考える方が自然である。一方、浅井自身は、それぞれの同話における初録分と再録分を「同じ話」として認識していると予想される。ここで筆者は、同話どうしに見出される差異(表現上の「揺れ」)をむしろ注目することにした。その理由は、同話を比較した場合に見出される差異に、話者の心性を知る上での情報が内在すると筆者が推測したことによる。

本稿では、2編の「ポヌンカヨ」における表現上の差異に関する検討を行う際、まず、それぞれのテキストにおけるストーリー展開と交差対句を調査した。その上で、導出されたそれぞれのストーリー展開およびそれぞれの交差対句についての対比を行った。ここでの分析の手法は、本稿における直接的な先行研究として筆者が位置付けた大喜多(2013a)の方法に準じている。

なお、「ポヌンカヨ①」および「ポヌンカヨ②」における物語類型は、基本的には、いわゆる「三人きょうだい譚」に類別されると筆者は判断した。「三人きょうだい譚」に関しては、丹菊が次のように書いている(丹菊 2012: 67-76)。

サハリンアイヌに伝承されてきた散文説話トゥイタハ tuytah には北海道アイヌとは異なる特徴がみられ、独特の話が多い。なかでも「三人きょうだい譚」は北海道に類話がみられない独特の話群である。三人兄妹あるいは三人姉妹が登場する話が多数採録されている。特定のジャンルに必ずしも限定はされないが、傾向としてはトゥイタハに多い。三人きょうだいが登場し、ある課題に二人が挑んで失敗し、最後の一人が成功する。成功する一人は能力が劣るとみなされていた者である。

本稿のテキストについてのストーリー展開に関する分析は、基本的には「三人きょうだい譚」の物語構成を前提に行った。

一方、交差対句に関しては、大喜多(2013a)と同様に、構文上に $A \cdot A'$ 、 $B \cdot B'$ 、 $C \cdot C'$ 、 $D \cdot D'$ のような対応が構築され、かつ、これらの対応が同心円状に配列した場合、これを、本稿では交差対句と呼ぶ。

$$A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D \rightarrow D' \rightarrow C' \rightarrow B' \rightarrow A'$$

従来、北海道アイヌの口頭テキストには交差対句と呼ばれる修辞技法の頻用が確認されてきた。さらに、このような交差対句の使用という修辭的な特徴が、数編の浅井のトゥイタハ(次節で示す)や、知里真志保が採録した樺太アイヌの口承文芸(『えぞおばけ列伝』(知里 1981)に掲載された「人食いおばけ」)(大喜多 2013b: 77-96)でも見出されている。

大喜多(2013a)では、物語の構成に影響を与える因子として次の2点((α)および(β))に注目しての分析を行った。

(α): ストーリーを編成しようとする話者の心性

(β): 交差対句を編成しようとする話者の心性

なお、大喜多(2013a)では、北海道アイヌである上田トシを話者とする、北海道アイヌの散文説話(ウウエペケレ)「カ

ラスに育てられた男の物語」(奥田 1990 : 169-200) を題材として、話者が物語を構成する際に、(α) と (β) が互いに独立して作用することを示唆する知見が得られた。筆者は本稿を、大喜多 (2013a) で得られた知見を樺太アイヌの口承に適用する試みの一つとして位置付けている。

2. 先行研究

本稿に対する直接的な先行研究は大喜多 (2013a) である。大喜多 (2013a) では、北海道アイヌのウエペケレとして類別される、上田トシによる「カラスに育てられた男の物語」(奥田 1990 : 169-200) をテキストとして、そこに見出されるストーリー展開の区分と交差対句の要素との対比を行った。なお、ここでのストーリー展開は、「カラスを育てられた男の物語」を採録した奥田がこの物語に対して示した話型に基づいており、交差対句のパターンに関しては、大喜多 (2013b) に掲載された「パターン①」の構成に基づいている。大喜多 (2013a) で得られた知見は、上田の「カラスに育てられた男の物語」の場合、「語」・「句」・「節」の配置に対して、前節に示した2種類の因子(α)および(β)が互いに独立して作用しているとは判断できるということである。本稿は、樺太アイヌの話者である浅井による2編の「ボヌンカヨ」を題材として、上記の(α)および(β)で示した因子が、物語の構成に対していかなる作用をもたらすかという点を明らかにすることを目的にしている。

ところで、北海道アイヌの口承テキストにおける修辞技法として頻用される交差対句は、北海道アイヌの心性に一因すると筆者は解釈しており(大喜多 2012a : 181-213)、このことは本稿における前提である。樺太アイヌにおける浅井を話者とした口承テキストに関する交差対句の使用については、「全集」に掲載された「さらわれた娘 - 84 (*haciko monimahpo* - 84)」、「箱流しの話 (*haku monka tuytah* - 88)」、「フンドシをとられた話 (*tepa tuytah*)」(こまでは、大喜多 2013c : 169-191)、「カラスと娘 (*etuhka neewamonimahpo*)」(大喜多 2013d)、「カニの話 (*takahka tuytah*)」(大喜多 2013b : 77-96)において確認されている。それに対して、交差対句が使用されていない事例としては「さらわれた娘 - 88 (*maas pontara pii*)」(大喜多 2013c : 169-191)が見出されている。「さらわれた娘 - 88 (*maas pontara pii*)」以外に関しては、樺太アイヌにおける浅井のトゥイタ、でも交差対句が修辞技法として使用されていることを示す事例である。

3. 話者とテキスト

本稿のテキストの話者は浅井である。「全集」に記載された、村崎 (2009) による浅井の紹介を以下に引用する。

本資料の語りべは浅井タケさん (1902-1994) である。浅井タケさんは、樺太西海岸の方言を話す完璧な話者だった。この人の生涯について簡単に説明する。

浅井タケさん(アイヌ名 TAHKONANNA)は、1902年4月5日樺太西海岸のオタスフというアイヌコタンで、山田チクユピ(アイヌ名 SAHPO)を父に、テツ子(アイヌ名 TEKAKUNKEMAH)を母に生まれた。生後まもなく失明し、ずっと全盲。生後すぐ父は死亡。母もタケさんが18歳の時に病死。両親を亡くしてからは、叔母夫婦に引き取られて、オタスフから4キロ北のライチシカに移り住んだ。オタスフのことばとライチシカのことばはほとんど同じという。つまり、同じ樺太西海岸の方言といってよい。その後、マオカ出身のアイヌ、浅井政治氏(明治23年6月10日生)の後妻となった。終戦後北海道に引き揚げてきてからは最初振内(フレナイ)に住んでいたが、1961年に夫に死別後、亡父の長男にいったん引き取られたが環境になじめず、1974年に北海道沙流郡門別町立特別養護老人ホーム「得陽園」に入園し、1993年東札幌病院に入院するまでの19年間を老人ホームで暮らした。その後、1993年5月子宮がんのために東札幌病院に入院したが、1994年4月30日について帰らぬ人となった。

「ピウスツキ鯨管プロジェクト」の縁で、私は、1984年2月に浅井タケさんに初めて巡り会った。以後10年間、当時札幌に住んでいた私は、機会ある毎に老人ホームを訪れて、浅井タケさんから樺太アイヌ語をたくさん教わった。これまでの北海道およびサハリンにおける私の調査によると、残念なことだが、浅井タケさんが樺太アイヌ語の最後の話者ということになる。

続いて、「全集」に記載された「ポヌンカヨ①」および「ポヌンカヨ②」を引用転記する。「ポヌンカヨ①」は1986年10月19日に、「ポヌンカヨ②」は1988年8月6日に、それぞれ村崎によって収録された。なお、テキストに付された角括弧内のアルファベットおよび記号は筆者によるものである。

◆「ポヌンカヨ①」

[A] サンヌビス村に3人の娘がいた。3人の娘がいて、魚をとっては食べ、マキをとってはくべ、している中に、娘、いや男たち、3人の男たちがいた。それで3人の娘がいて、マキをとってはくべ、魚をとっては食べしていたとき。そうしている中に、ある日、上の娘はその次の娘、中の娘と一緒に、マキを取りに山へ行ったらとき。それで、小さい娘、下の娘が留守番をしたとき。[/A]

[B] 留守番をしていたが、(山に行った)娘たちが帰ってきたのだが、紐で縛られた赤ん坊を拾って抱いて帰って来たとき。それで、それから、家に連れて帰って、とても喜んでうれしそうに話しながら帰って来たとき。何だろうと思ったら、娘たちは小さい赤ん坊を一人連れて帰って来て、今こうやってあやしたとき。

ni'osuhtaa cipaa tootoo

ni'osuhtaa cipaa henne(h)

こうしながらあやした。踊っているんだとき、その子どもが。もうとてもみんな喜んでいたとき。

喜んで、食事の用意をしても一緒に食べて、食べ物を口に入れて一緒に食べたとき。

そうしていたある日、またマキとりに山へ行ったらとき。下の娘が子どもと留守番をしたとき。

それで、上の姉さんたちが2人でマキとりに山へ行ったらとき。その後で、その子のおしめを下の娘は替えて、新しくおしめを替えた。

こうやっている中に、また寝かせて、それからちょっと便所に出たとき。[/B]

[C] 便所に出たら、その家の中から、何だか物音がしたとき。

それだから戸の間からこうして中を見たら、小さい子と思っていたものを見たところ、それは大男だったとき。

(大男?M)

'onneru というのは大きい人だということだ。そうしてそれが家の中をくるくる廻って歩いてるんだと。(それ、アイヌ語で言って下さい。M)

歩いてるとき。クルクルクルと歩いていて、こう言ったとき。

「ねえ、一体娘たちは何を食べているのだろう? 何を食べてるのだろうか?」

と言いながら、お椀を見つけて端をちぎって口に入れる、ひしゃくを見つけて端をちぎって口に入れる、こんなことをしていたとき。(下の娘は)これはきとお化けの子だと思ったとき。

そう思って、それからしばらくいたが、勇気を出して中に入ったとき。入ったら、静かにやすやすと寝ていたとき。

寝ていたのだが、それから姉さんたちがマキとりから帰って来たが、その子のいるところに入って、また喜んで抱き上げてまたあやした。

ni'osuh taa cipaa kenne

ni'osuh taa cipaa tootoo

こう言ってあやしていたが、それから姉さんたちは食事をしたとき。

自分たちも食べて、その子にも食べさせた。

そしてその娘が言うには、

「お前はうそをついている。」

と言ったとき。

「じいさんと言うのか？ 赤ん坊と言うのか！ どうしてこんな風に歩き回っていると妹は言うのか？」

と姉さんたちは言って、妹を叱ったとき。

わかるかい？（うん。M）

それで、それから、寝た。

次の日、こんどは下の娘がその姉さん、上の姉さんと一緒に出て、下の姉さんが留守番したとき。留守番をして、その子のおしめを替えた。おしめを替えて、それから食べさせて、それからまた寝かせたとき。

寝かせてから、また置いて便所に出たとき。便所に出て用を足して来たら、家の中から何か物音がしたとき。

（また音がしたの！M）

何か物音がしたから、戸の間からのぞいて見たら、その子が歩き回っていたとき。

「ねえ、一体この家の娘たちは、何を食べているんだろう？ わしは腹が空いたわい。娘たちは何を食べているんだろう？」

と言いながら、家の中を歩き回って、鍋の中のをのぞき、またお椀や食器の端をちぎって口に入れる、ひしゃくもちぎる、端をちぎって口の中にいれる、という風だったとき。

しばらくそのまま見ていたが、それから頭を引っ込めて、戸から勇気を出して、戸を開けて入ってみたら、その子は寝ていたとき。

寝ていたから、それから、姉たちは外に出て、また山へマキとりに行行ってそれから帰ってきたとき。

帰ってきて、こんどは、中の娘と末の娘が赤ん坊を抱き上げて、

ni'osuh taa cipaa tootoo

ni'osuh taa cipaa kenne

と言って、あやしたとき。あやしてから、こんどまた寝かせた。

その次の日、またその末娘と、こんど上の娘と一緒にマキとりに行った。その中の娘が、子どもと留守番した。子どもとはじめは、一番下の娘が留守番したけれども、その次の日はその下の、中の娘がその子どもと留守番した。

こんどは一番上の娘が子どもと留守番したとき。

こうしてまた、おしめを替えて替えてから、すぐに寝かしてから置いて、便所に出たとき。

こうして毎日オシッコしてオシッコしにいった。その後で、オシッコしに行った後で、しばらくすると家の中から何か物音がしたとき。

何か物音がしたから、戸を開け、戸の間から、戸の間から、こうしてのぞいて見たら、その小さい子が、きれいな大男になって、歩き回っていたとき。

「どれどれ、娘たちは何を食べているんだろう？ わしは腹がへった。何を食ってるんだ！ あちこちから食べ物を集めて来ている。」

と言ったとき、その子が。

その様子を見て、娘たちは見てから、帰った。帰って、こんどは勇気を出して入ってみたら、すやすやと寝ていたとき。[/C]

それでこんど、その妹、姉と妹は、山からマキとりから帰って来て、話し合っ、それから次の日またマキとりに行ったとき。

[D]マキとりをして、下の娘が留守番をして、マキを取って取って、火をうんと燃やして、そこにその子を抱いて、

ni'osuh taa cipaa tootoo

ni'osuh taa cipaa kenne

ponunkayoh, ponunkayoh

と言いながら、火の中に子どもを投げて逃げたとき。[D] [E]放って逃げて、しばらく行った時、見たら、姉さんの首飾を忘れたとき。玉を忘れたから、それを探しに行ったら、その家の中であのポヌンカヨが歩き回っていたとき。

「さては、姉さんたち、お前たちの肉をわしは食いたくて、子どもに化けて、木の根元に座っていたんだが、わしを拾って喜んで、そして今、火の中にわしを投げ入れて、置いて逃げたな！」

と言いながら、炭を削っていたとき。[E]

[F]それでこんど、姉たちは、玉を取って、それから、逃げて出て行ったとき。そうして(後)を見ると、そのポヌンカヨが自分たちを追いかけて来たとき。[F]

[G]それだから、姉さんは、自分のクシを投げて大きい林を作った。それからまた、その下の方へ逃げて行って、そのウンカヨもまた、林を抜けて行ったとき。[/G]

[G´]行ったから、あわてて、その姉さんは、その、中の娘が今クシを投げて、そこに大きい山を作って、また逃げた。[/G´] [F´]逃げて逃げて見たら、また(お化けが)山を通り抜けて、追い駆けて来ていたとき。[/F´]

[E´]それでどンドン行ったら、一本の道をずっと行ったら、一人のババが魚を釣っていたとき。

「ねえおばあさん、おばあさんお願い、私を渡らせてちょうだい、私たちを渡らせて、渡らせて！」
と言ったとき。

そう言ったら、ババは自分の足を伸ばした。(娘たちは)その上を下りて、渡って、それから隠れたとき。

隠れていて、(ウンカヨの方)を見ると、そのババは魚を釣っていて、そのウンカヨが川のところに来たとき。

「ねえババや、わしを渡らせてくれ、渡らせてくれ。サンヌペツの娘たちの肉をわしは食いたくて、わしを育てさせていたら、わしを火に投げて、わしを置いて逃げてしまった。わしを渡らせてくれ、渡らせてくれ。」

と言ったとき。

ババ自身は、「娘たちに会わなかった。」

と言ったとき。

「会わなかったよ。」

と言ったけれど、

「わしを渡らせてくれ、渡らせてくれ。」

と言うから、それから足を伸ばして、

「足を、深い深いところを、足を伝って渡りなさい。」

と言ったとき。[/E´]

[D´]それで、深い深いところを足を伝って渡って行ったら、川の真ん中を渡った時、

「ああ、オレの足が！」

と言って、足を引っ込めた途端、そのウンカヨ、川の中に入ってしまったとき。[/D´] [C´]流れた下で行くうちに、腹の上に木の枝が刺さって、腹が裂けて、そこからその虫だの、トカゲだのカエルだのが、その腹から出て来た。そうして、そのウンカヨはそこで死んだとき。

死んでそれから、娘たちはそのことを話し合って、ババにそれを話すために、ババのそばに来て魚釣りをして、魚も殺して、ババに魚を殺してお供えしてから、それから家へ帰ったとき。[/C´]

[B´]帰って、家に帰って、しばらくたって、マキを取ってはくべ、魚を捕っては食べしていると、男たちが、3人の男が来たとき。3人の男が来て、娘たちに、娘たちに会うために、もやを降らせて、暗くしたとき。家の中を暗くしたとき。

「今までここにいたのに誰も来なかったが、今誰かが来るんだね。」

と言っていたが、もやを降らせて、暗くしてしばらくいたが、男たちが入ってきて、辺りが明るくなったとき。夜が明けたとき。

そうして、男たちは言ったとき。

「あのね、娘たちや。ウンカヨを捕って殺したのは一人でしたのじゃないよ。みんなに助けってもらって、ようやくウンカヨをやっつけたんだよ。何を悔やんで、こんなに暗くしているのかい？」

と言って、もやの半分を窓から出し、もやの半分を窓、戸口から出した。辺りが明るくなったとき。[B´]

[A´]それからこんど、その娘たちは、中の娘は中の男と夫婦になった。下の娘は一番若い男と一緒にになった。一番上の男は、上の娘と一緒にあって、みんな所帯を持って、きれいな家を建てて、良い家を建てて、そこで、みんなそれぞれ家を持って暮らしていたが、子どももできて、村も栄え、国も栄えて、空飛ぶ鳥も、そこに羽を落として、それで、人々はそれを拾ってホウキやハンにしたということだ。そういう話だ。[A´]

◆「ボヌンカヨ②」

(続けてください。Ko)

(言ってください。M)

[H]3人の娘がいた。3人の娘がいて、その、マキをとってはくべ、魚をとっては食べ、ユリ根をほっては食べていたが、そのうち、ある日に、山に行くと、2人の娘がマキをとった。[H]

[I]末娘が家において、そうして、娘たちが山に行くとマキをとっていたら、子どもが一人いたとき。一人の男の子に出会ったとき。こうしてこんど木のゆりかごに縛られた子どもに会って、それを抱いて、それから下りて来たら、あの末娘が家において、何とかかんとか言って、(アイヌ語で言ってください。M) 何とか、かんとか、言いながら帰って来たとき、山から。

帰ってきたら、末娘を見ると、木に縛られた子どもを抱いて下りて来たとき、山から。それから皆で喜んで、その子を育ててあやしたんだが、

ni'osuhtaa cipaa tootoo

ni'osuhtaa cipaa keeneh と言ってあやしなから躍らせた。

こうしていたが、またある日、マキとりに行ったとき。こんどは中の娘と上の娘が留守番をした。上の娘と小さい娘がマキとりに行った。その、中の娘が留守番をした。子どもと留守番をして、おしめをとり替えて、そのように世話をしながら、そのゆりかごに縛られて置いて、そのまま便所に出たとき。

出た後でしばらくして、家の中から何か物音がしたとき。

だから、戸口に沿ってその間から中をのぞいたら、小さい子どもだと思ったものが大男になっていたとき。

「どれどれ、この家の娘たちは何を食べているんだろう？ 何を食べているんだろう？」

と言ったとき。

「小さい子どもだと思って(娘たちが)拾って連れて来たんだ。おれはその肉が食いたくて木の根元にいたんだが、娘たちは喜んで帰ってきた。」

と言いながら、鍋に入れるために、茶碗でもひしゃくでも、端をむしっては口の中に入れ、入れしている中に、娘はそれを見ていたが、勇気を出して戸を開けたら、すやすやとまた寝ていたとき。

そうして今、夕方になって、姉さんたちが帰ってきて山であった出来事を話したが、中の娘は姉さんたちの言うことを疑ったとき。

「小さい子だって？」

と言ったとき。疑った。

それから次の日、下の方の娘と、末娘、中の娘とがマキとりに行った。姉が留守番をした。それから、姉さんは洗

濯をして、おしめもと替えて、それからゆりかごに寝かせて、そこで寝て、便所に行った。

便所に行って、また用を足して入って、また行ってみたら、家の中から何か物音がしたとき。

それで、戸の間から見たら、その実際はその子どもが、静かにゆっくりと家の中を歩いてたとき。お椀を見つけては端をむしる、口に入れる、ひしゃくを見つけては端をむしる口に入れる、という風にしたとき。

それからこんど、娘がそれを見て、勇気を出して入って見たこと一部始終を、一方姉さんたちが帰ってきて、話したとき。皆で話し合って、今みんな本当だと思ったとき。

それで、火を焚く者は火を焚いた。マキをとる者はマキをとった。それから次の日、言葉を掛けて、マキをとる者はマキをとり、火を焚く者は火を焚き、こうしていたが、支度してその後で、その子を火の中に投げて、逃げようと話し合ったとき。

それで、その次の日、中の娘と末の娘がマキとりに行った。上の娘は留守番して火を焚いた。それからマキをとってから、家に入って、こんどその子を抱き上げてあやした。

ni'osuhtaa cipaa tootoo

ni'osuhtaa cipaa keeneh

ponunkayoh ponunkayoh

と言ってあやして、

ni'osuhtaa cipaa tootoo

ni'osuhtaa cipaa keeneh

ponunkayoh ponunkayoh

と言ってあやしてから、火の中に投げ入れて、放って、逃げて行ったとき。[I] [J]火の中に投げ入れて、放って、逃げて行ったんだが、逃げてしばらくして見ると、後から何者かが追いかけて来たのだった。[J]

[K]それから、その上の姉がその櫛を後の方に投げて、大きい雑木林を作った。それからまたしばらく逃げてから見ると、また林を抜けて来るのだった。[K]

[L]それで中の姉が玉を投げた。それが大きな林を作った。そうしてまた逃げた。しばらく逃げて後ろを見るとまたそのボヌンカヨが追って来るんだとき。[L] [L']それからイチバン小サイ妹がその櫛をそれに投げた。投げて大きい川をつくったとき。[L'] [K']川をつくって逃げて逃げて後ろを見ると、それがまだやって来るんだとき。そうして来てしばらくして、(一人でやって来たんだろう)、と一人のババがそこで魚を釣っていたとき。

「ねえ、おばあさん、私たちを渡して、渡してちょうだい。お化けの男が追いかけてくるの。渡して、渡して下さい。」と言ったとき。

それからそのババは足を伸ばしてくれて、その上を渡って川を渡ったとき。それからかくれた。ババは知らんふりして魚を釣っていたとき。[K']

[J']魚を釣っていてふと見ると、本当に言った通りに、娘たちが言った通りに、そのお化けの男がやって来るのだった。

やって来て、ババに、

「ねえ、ばあさんや、オレを渡してくれ、渡してくれ。」

と言ったとき。

それでババは渡してやった。お化けを渡してやるために足を伸ばした。

「その深いとこ、深いとこ、足元に気をつけて渡りなさい。」

と言ったとき。深いとこ、深いとこ、足元に気をつけて渡ったら、その川の真中を渡るとき

「あ、あれ、おれの足が！」

と言って、川の中に足を引ばられたものだから、お化けは水の中に入ってしまったとき。

それからこう言ったとき。

ruru kuu cakah ruru kuu

ruru kuu cakah ruru kuu

と言ったら、川の水はみんな干上がったとき。それでそのパパは、

rure 'atu cakah rure 'atu

rure 'atu cakah rure 'atu[/J´]

[I´] そうしたら、川水が深くなって、すっかり深くなって、岸を廻ってお化けは流されて流されて、腹の上に木の枝が刺さって腹が裂けて、それからそこからいろんな虫、カナヘビやカエルなどの虫が腹から出て死んでしまったとき。川で。

おかげで、おかげ様で、娘やパパたちは良かった良かったと話し合っていたが、そのそばに、とった魚などもお供えしたり山でとった山菜もお供えしたり、[I´] [H´] そうしている中に娘たちは家へ帰って、家のこともちゃんと整えてそれからみんな（幸せに）暮らしたとき。[H´]

こんな昔話だ。

4. ストーリー展開に関する対比

本節では、2編の「ボヌンカヨ」物語に関するストーリー展開上の対比を示す。本稿では、2編の「ボヌンカヨ」物語の物語類型を「三人きょうだい譚」としたので、取り分け、3人の姉妹の動向に注目しての分析を行った。

出来事	「ボヌンカヨ①」	「ボヌンカヨ②」
I : [薪とり①] ↓ 男の子を拾う	長女と次女 (三女は留守番) 長女と次女	長女と次女 (三女は留守番) 長女と次女
II : [薪とり②] ↓ 大男を発見	長女と次女 (三女は留守番) <u>三女</u>	長女と三女 (次女は留守番) <u>次女</u>
III : [薪とり③] ↓ 大男を発見	<u>長女</u> と三女 (次女は留守番) <u>次女</u>	<u>次女</u> と三女 (長女は留守番) <u>長女</u>
IV : [薪とり④] ↓ 大男を発見	<u>長女</u> と <u>三女</u> (次女は留守番) [ここで修正が入る] <u>次女</u> と <u>三女</u> (長女は留守番) <u>長女</u>	記載なし
V : [薪とり⑤] ↓ 男の子を火に落とす	<u>長女</u> と <u>次女</u> (三女は留守番) <u>三女</u>	<u>次女</u> と <u>三女</u> (長女は留守番) <u>長女</u>
VI : [大男からの逃走]	①長女が <u>楡</u> を投げる→林が生じる ②次女が <u>楡</u> を投げる→山が生じる ③三女が投げる記録はない 玉を投げる記録はない	①長女が <u>楡</u> を投げる→林が生じる。 ②次女が <u>玉</u> を投げる→林が生じる。 ③ <u>三女</u> が <u>楡</u> を投げる→ <u>川</u> が生じる
VII : [パパとの出会い]	大男が川に落ちる ↓ 大男の正体	大男が川に落ちる ↓ 大男の正体
VIII : [三人の男の来訪] ↓ 三人の娘との結婚	<u>三人の男</u> が来訪 ↓ <u>三人の娘</u> との結婚	記載なし
IX : [結語]	<u>結語あり</u>	<u>結語なし</u>

ここでは、「ポヌンカヨ」物語のストーリー展開をⅠ～Ⅸで示す区分で分割した。

Ⅰは、[薪とり①]である。この箇所は、長女と次女が薪をとりに行き、「男の子」を拾って家に帰ってくる場面が描かれている。ここで、三女は留守番をしている。この記述に関しては「ポヌンカヨ①」および「ポヌンカヨ②」において共通している。続くⅡは、[薪とり②]である。ここでは、2人の娘が薪とりに出かけ、1人の娘が留守番をしている時に、留守番の娘が「大男」を発見する場面である。ここで、「ポヌンカヨ①」の場合は、薪とりに出かけた娘が長女と次女であるのに対して、「ポヌンカヨ②」の場合は、薪とりに出かけた娘が長女と三女になっており食い違いが見られる。また、留守番をしていた娘は、「ポヌンカヨ①」では三女であるが、「ポヌンカヨ②」では次女である。また、Ⅲも、薪とりの記載である（[薪とり③]）。この箇所は、基本的には[薪とり②]での出来事が、人を変えて再現されている。「ポヌンカヨ①」の場合は、長女と三女が薪とりに出かけ、次女が「大男」を発見する。それに対して、「ポヌンカヨ②」では、次女と三女が薪とりに出かけ、長女が「大男」を発見する。ここでの記述に関しても、「ポヌンカヨ①」と「ポヌンカヨ②」では食い違っている。Ⅳは、[薪とり④]である。この箇所については、「ポヌンカヨ①」には記載があるが、「ポヌンカヨ②」には記載がない。「ポヌンカヨ①」に関しては、[薪とり③]と同様の事柄が人を変えて再現されている。浅井は、はじめは長女と三女が薪とりに出かけて次女を留守番とするが、後で修正され、次女と三女が薪とりで長女を留守番としている。

Ⅴには、「男の子」を火に落す場面が書かれている（[薪とり⑤]）。はじめは、[薪とり②]などと同様に、2人の娘が薪とりに行き、1人の娘が留守番をする。その後、留守番の娘が「男の子」を火の中に落す。ここでも、「ポヌンカヨ①」では薪とりに行く娘が長女・次女であり留守番が三女であるのに対し、「ポヌンカヨ②」では薪とりが次女・三女で、留守番が長女であるという食い違いがある。

Ⅵは、娘たちが「大男」から逃げる場面である。ここで、「ポヌンカヨ①」では、長女・次女が櫛を投げて林と山を生じさせるが三女は何も投げない。一方、「ポヌンカヨ②」では、長女が櫛を、次女が玉をそれぞれ投げ、共に、林を生じさせる。それに続き、三女が櫛を投げ、川を生じさせる。

Ⅶ（[パパとの出会い]）では、「ポヌンカヨ①」と「ポヌンカヨ②」の両方とも、「大男」が川に落ち、「大男」の正体が現れるという点で一致している。Ⅷ（[三人の男の来訪]）に関しては、「ポヌンカヨ①」には記載があるが、「ポヌンカヨ②」にはその記載がない。ここで、「ポヌンカヨ①」には、3人の娘のところに3人の男が現れて結婚する場面がある。

最後のⅨ（[結語]）の「ポヌンカヨ①」には、「子どももできて、村も栄え、国も栄えて、空飛ぶ鳥も、そこに羽を落として、それで、人々はそれを拾ってホウキやハシにしたということだ。」という、話の結末に使用される「常套句」が配置されているが、一方の「ポヌンカヨ②」では、それが省略されている。

以上のように、Ⅰ～Ⅸの区分では、図式中の下線でも示した箇所において、「ポヌンカヨ①」と「ポヌンカヨ②」での食い違いが見受けられた。また、全般的にも「ポヌンカヨ①」は「ポヌンカヨ②」に比べて詳細である。

ところで、ストーリー展開を見てみると、「ポヌンカヨ①」と「ポヌンカヨ②」では、区分Ⅰ以外の全ての箇所（Ⅱ～Ⅸ）において、登場人物もしくは登場人物にまつわる事柄に関する食い違いが確認される。この様な登場人物に関わる言い間違いについては、浅井の他のツイタムでも見出されている。一般的に考えると、登場人物に関する事柄は、物語の構成上、最も重要な事柄の一つである。つまり、物語の登場人物を間違えるということは、物語の構成に関わる根幹的な問題にまで発展する可能性を持つ。しかし、浅井のツイタムに見られる齟齬は、浅井自身が、物語の登場人物にまつわる事柄をそれ程重視していないともとれる事例である。これを、浅井による、単なる言い間違いとしてとることもできようが、一方では、浅井が口承を構成する際、登場人物の動向以上に優先すべき要因が存在することによって考えることもできる。この点に関しては、今後慎重に検討を進めるべきテーマであると筆者は考えている。なお、Ⅵ（[大男からの逃走]）における、登場人物の行為に見られる、「ポヌンカヨ①」と「ポヌンカヨ②」での食い違いに関しては、本稿の7節において、交差対句との関連から述べたい。

5. 交差対句に関する対比

本節では、はじめに、2編の「ボヌンカヨ」物語に見出されるそれぞれの交差対句を示し、その上で、それぞれの交差対句を対比する。「ボヌンカヨ①」および「ボヌンカヨ②」のテキストに施された、記号で挟まれた箇所（例えば、[A]と[/A]）を図式化すると次のようになる。

◆交差対句「ボヌンカヨ①」

- A 日々の暮らし
- B 赤ん坊を連れて帰る
- C 赤ん坊の異変
- D 火に落とされるボヌンカヨ
- E ボヌンカヨの独白
- F 追いかけるボヌンカヨ
- G クシを林に変える
- G´ クシを山に変える
- F´ 追いかけるボヌンカヨ
- E´ ボヌンカヨとパパの会話
- D´ 水に落とされるボヌンカヨ
- C´ 赤ん坊の正体
- B´ 三人の男が来る
- A´ その後の暮らし

◆交差対句「ボヌンカヨ②」

- H 日々の暮らし
- I 男の子の異変
- J 火に落とされる
- K 林
- L 林
- L´ 川
- K´ 川
- J´ 水に落とされる
- I´ 男の子の正体
- H´ その後の暮らし

はじめに、「ボヌンカヨ①」についてである。AとA´は、物語に描かれた出来事の前（A）と後の暮らし（A´）が対応している。BとB´に関しては、娘たちが「赤ん坊（男の子）」を連れてくる記事（B）と、3人の男が娘たちを訪ねてくる記事（B´）が対応している。この両者は、娘たちのところに他の人物が来訪するという点で一致している。Cには、「赤ん坊」が「大男」に変化する「異変」が描かれているのに対し、C´は、「赤ん坊」の正体が明らかになる場面である。

Dでは、「赤ん坊」が火に落とされるのに対して、D´では、「ボヌンカヨ（大男）」が水に落とされる。ここでは、「ボヌンカヨ」が殺されるために何かに落とされるという点で一致している。Eは、「ボヌンカヨ」の独白が書かれている。一方、

E´には、「ボヌンカヨ」と「パパ」が会話をしている。ここでは、「ボヌンカヨ」が話をするという点で一致している。F・F´に関しては、共に、娘たちを追いかける「ボヌンカヨ」が描かれている。また、Gでは、娘が櫛を投げて林を生じさせる。一方、G´では、娘が櫛を投げて山を生じさせる。この両者は林と山という違いはあるが似ている。「ボヌンカヨ①」の交差対句には合計7対の対応が確認できる。

続いて「ボヌンカヨ②」についてである。H・H´に関しては、物語に描かれた出来事の前（H）と後の暮らし（H´）が対応している。Iでは、「男の子（赤ん坊）」が「大男」へと変化する様子が書かれている。一方、I´では、「男の子」の正体が明らかになる。Jには、「男の子」が火に落とされるのに対して、J´では、「ボヌンカヨ（大男）」が水に落とされる。ここでは、共に、「ボヌンカヨ」は殺されるために落とされる。KおよびLに関しては、娘が投じた櫛と玉がそれぞれ林になる場面である。一方、K´とL´には、川についての記載がある。ここでのK・K´およびL・L´に関しては、それぞれ、林と川が対応していると筆者は判断した。なお、「ボヌンカヨ②」の交差対句には、合計5対の対応を見出すことができる。

ここで、「ボヌンカヨ①」および「ボヌンカヨ②」に見出されたそれぞれの交差対句を対比する。まず、「ボヌンカヨ①」の交差対句の場合は合計7対の対応を持っていたが、一方、「ボヌンカヨ②」の場合は5対の対応によって交差対句が構成されている。また、「ボヌンカヨ②」の場合は、上記の「ボヌンカヨ①」における交差対句の図式に下線を施した、B・B´、E・E´、F・F´の対応が省略されている。それに対して、娘が「大男」から逃げる箇所に関しては、「ボヌンカヨ②」の方が、対応が一つ多い。全体的にみると、「ボヌンカヨ①」は、「ボヌンカヨ②」よりも詳細な構造である。

6. ストーリー展開と交差対句の対比

本節では、4節および5節で得られた知見に基づき、「ボヌンカヨ①」および「ボヌンカヨ②」に関する、ストーリー展開と交差対句についての対比を行う。

まず、ストーリー展開に関しては、「ボヌンカヨ②」に比べると、「ボヌンカヨ①」は、より詳細である。また、交差対句の対応の数については、ストーリー展開と同様に、「ボヌンカヨ①」は、「ボヌンカヨ②」よりも緻密である。一方、交差対句の折り返し付近に配置された、娘たちが「大男」から逃げる場面に関しては、「ボヌンカヨ①」よりも「ボヌンカヨ②」の方が、対応が多い。

「ボヌンカヨ①」と「ボヌンカヨ②」を対比した場合、総じて見ると、初録の「ボヌンカヨ①」の方が再録分である「ボヌンカヨ②」よりも、ストーリー展開および交差対句に関しては、詳細かつ緻密な構造である。この点については、大喜多(2013c)で紹介した浅井の「さらわれた娘」における初録分と再録分との関係と一致している。「さらわれた娘」の場合も、初録分は、再録分に比べて分量が多く、かつ、初録分に確認された交差対句は、再録分には見出されなかった。（ここで、初録分「さらわれた娘 - 84 (*haciko monimahpo-84*)」を「さらわれた娘①」とし、再録分「さらわれた娘 - 88 (*maas pontara pii*)」を「さらわれた娘②」とする。）

次に、ストーリー展開および交差対句の詳細さ（緻密さ）について、「ボヌンカヨ①」・「ボヌンカヨ②」・「さらわれた娘①」・「さらわれた娘②」を対比し、表として示す。

	「ボヌンカヨ①」	「ボヌンカヨ②」	「さらわれた娘①」	「さらわれた娘②」
ストーリー展開	より詳細である	省略箇所がある	より詳細である	簡素化されている
交差対句	より緻密である	簡素化されている	見出される	見出されない

7. 交差対句の対応の種類との関連

前節に示したように、「ボヌンカヨ①」と「ボヌンカヨ②」を対比した場合、ストーリー展開と交差対句の詳細さ（緻密さ）に関しては、その傾向が一致しており、いずれも、「ボヌンカヨ①」が優っていた。しかし、一方では、交差対句の

細部で見た場合、5節に示したように、折り返し付近の対応に関しては、「ボヌンカヨ②」の方が「ボヌンカヨ①」よりも1対多く、より緻密である。この点に関して筆者は、対応の種類の違いにその原因を求めた。

対応の種類に関しては、現在までに次の4種類が、北海道アイヌの口承テキストにおける交差対句に見出されている。本稿のテキストは北海道アイヌではなく樺太アイヌの口承テキストであるが、樺太アイヌでの交差対句における対応の種類に関しては現在まで検討されていないため、便宜上、本稿では、現在まで確認されている、北海道アイヌにおける4種類の対応の種類をそのまま適用した。以下、この4種類の対応の種類を示す。

【対応の種類】

- ①類似要素どうしによる対応：類似した要素どうしで対応が構築される。(大喜多 2011 : 24-32)
- ②正反対の要素どうしによる対応：正反対の要素どうしで対応が構築される。(大喜多 2012b : 19-23)
- ③物理的变化どうしによる対応：物理的变化の様子どうしが対をつくることによって対応が構築される。(大喜多 2012a : 181-213)
- ④物理的变化の前と後による対応：物理的变化もしくは出来事が生じる「前」と「後」の事柄が対となり、対応が構築される。(大喜多 2012a : 181-213)

ここで、「正反対の要素どうしによる対応」における「正反対」という概念をより明確にするため、本稿における「正反対」の意味を以下に示す。本稿における「正反対」とは、交差対句の後半箇所（折り返し以降の箇所）に記載された要素が、前半（折り返し以前）の要素の「正反対」になることを示している。ここで、「正反対」とは、前半の要素の除去・否定、もしくは、前半と後半の要素が対照的な関係にある場合をいう。「正反対」の関係に該当する事例を以下に示す。なお、ここでの「正反対」の概念に関しては、ルーマニアの異郷訪問譚「兵士としての少女」に見出された、ポップのモデルでの、いわゆる「裏返し」の概念を参考に行っている（大林 1979 : 1-9、依田 1982 : 47-57）。

前半箇所	⇔	後半箇所	関係
生じる		失う	「失う」は「生じる」の除去および否定
侵入		退出	「退出」は「侵入」の除去および否定
明るい		暗い	「明るい」と「暗い」は対照的關係
男		女	「男」と「女」は対照的關係
この世		あの世	「この世」と「あの世」は対照的關係
結果		原因	「結果」と「原因」は対照的關係

ここで、対応の種類を交差対句に適用した事例を紹介する。次の事例は、上田トシを話者とする北海道アイヌのウウエベケレ「カラスに育てられた男の物語」に見出される交差対句に関してである。なお、ここでの交差対句は、大喜多(2013a)で示したものを引用しており、その上で、それぞれの対応の種類に関わる事柄を書き添えている。

◆交差対句「カラスに育てられた男の物語」：対応の種類

- A 母と息子の暮らし：「出来事」の前
- B シントコやバッチを持ってくる：「持ってくる」
- C 息子が成長する：「成長」
- D 母の行為に対しての疑念→糞を食べていた：「疑念の解決」
- E 母が山から家に帰ってくる：「家に帰る」

- F 母が正体を告げる：「告白」
- F[˘] 母がシントコとパッチを盗んだことを告げる：「告白」
- E[˘] 母がハシボソガラスになり家から出る：「家を出る」（「家に帰る」の否定）
- D[˘] 息子がわからない父母→息子を認識する父母：「疑念の解決」
- C[˘] 息子が成長した経緯：「成長」
- B[˘] シントコやパッチを戻す：「持ってくる」の除去
- A[˘] その後の暮らし：「出来事」の後

A・A[˘]については、「出来事」の前と後の様子が対応している。これは、「④物理的変化の前と後による対応」である。B・B[˘]では、Bに記載されたシントコやパッチがB[˘]において除去される。したがって、これは、「②正反対の要素どうしによる対応」に該当する。また、C・C[˘]に関しては、「成長」が描かれた点で共通しているため、「①類似要素どうしによる対応」である。D・D[˘]の場合も「疑念の解決」で共通しているため、「①類似要素どうしによる対応」である。E・E[˘]については、E[˘]「家を出る」は、E「家に帰る」の否定である。したがって、E・E[˘]は「②正反対の要素どうしによる対応」となる。F・F[˘]では「告白」について書かれているので、「①類似要素どうしによる対応」である。

対応の種類（「カラスに育てられた男の物語」）

- ①類似要素どうしによる対応：C・C[˘]、D・D[˘]、F・F[˘]
- ②正反対の要素どうしによる対応：B・B[˘]、E・E[˘]
- ③物理的変化どうしによる対応：該当なし
- ④物理的変化の前と後による対応：A・A[˘]

続いて、「ボヌンカヨ①」および「ボヌンカヨ②」に見出されるそれぞれの交差対句に対して、対応の種類をあてはめてみる。

◆交差対句「ボヌンカヨ①」：対応の種類

- A 日々の暮らし：「出来事」の前
- B 赤ん坊を連れて帰る：「他者の来訪」「災いの招来」
- C 赤ん坊の異変：「結果」
- D 火に落とされるボヌンカヨ：「火」「殺されるために落される」
- E ボヌンカヨの独白：「言葉」
- F 追いかけるボヌンカヨ：「追跡」
- G クシを林に変える：「変化させる」
- G[˘] クシを山に変える：「変化させる」
- F[˘] 追いかけるボヌンカヨ：「追跡」
- E[˘] ボヌンカヨとパパの会話：「言葉」
- D[˘] 水に落とされるボヌンカヨ：「水」「殺されるために落される」
- C[˘] 赤ん坊の正体：「原因」
- B[˘] 三人の男が来る：「他者の来訪」「幸せの招来」
- A[˘] その後の暮らし：「出来事」の後

◆交差対句「ボヌンカヨ②」: 対応の種類

- H 日々の暮らし: 「出来事」の前
 I 男の子の異変: 「結果」
 J 火に落とされる: 「火」「殺されるために落される」
 K 林: 「火」(「変化させる」)
 L 林: 「火」(「変化させる」)
 L[˘] 川: 「水」(「変化させる」)
 K[˘] 川: 「水」(「変化させる」ではない)
 J[˘] 水に落とされる: 「水」「殺されるために落される」
 I[˘] 男の子の正体: 「原因」
 H[˘] その後の暮らし: 「出来事」の後

「ボヌンカヨ①」では、A・A[˘]は、「出来事」の前と後の様子の対応であるので、対応の種類④である。B・B[˘]は「他者の来訪」という観点では対応の種類①であるが、「災いの招来」と「幸せの招来」との対比と捉えれば、対応の種類②である。CとC[˘]については、「結果」と「原因」との関係であるので、対応の種類②である。D・D[˘]に関しては、「火」と「水」の対比という点では対応の種類②であるが、「殺されるために落される」という点では対応の種類①である。E・E[˘]、F・F[˘]、G・G[˘]は、それぞれ「言葉」、「追跡」、「変化させる」で一致しており、対応の種類①である。

一方、「ボヌンカヨ②」に関しては次の通りである。H・H[˘]は、「出来事」の前後であるので対応の種類④である。I・I[˘]は、「結果」と「原因」であるので、対応の種類②である。J・J[˘]は、「火」と「水」という観点では対応の種類②であるが、「殺されるために落される」という点では、対応の種類①となる。K・K[˘]およびL・L[˘]は、それぞれ、「火」と「水」が対応している。ここで、L・L[˘]の場合は、「変化させる」という行為においては一致している(対応の種類①)が、K・K[˘]に関しては、K[˘]の箇所「変化させる」行為がないため、対応の種類①は該当しない。

上述の事柄をまとめると次のようになる。なお、B・B[˘]、D・D[˘]、J・J[˘]、L・L[˘]については重複している。

対応の種類	「ボヌンカヨ①」	「ボヌンカヨ②」
①類似要素どうしによる対応:	B・B [˘] 、D・D [˘] 、E・E [˘] 、F・F [˘] 、G・G [˘]	J・J [˘] 、L・L [˘]
②正反対の要素どうしによる対応:	B・B [˘] 、C・C [˘] 、D・D [˘]	I・I [˘] 、J・J [˘] 、K・K [˘] 、L・L [˘]
③物理的变化どうしによる対応:	該当なし	該当なし
④物理的变化の前と後による対応:	A・A [˘]	H・H [˘]

「ボヌンカヨ①」と「ボヌンカヨ②」における対応の種類を対比した場合、「ボヌンカヨ①」は類似要素どうしによる対応(対応の種類①)の比率が高いが、「ボヌンカヨ②」の場合は、正反対の要素どうしによる対応(対応の種類②)の比率が高い。このことは、例え「同話」であったとしても、交差対句を構成する対応の種類における使用比率に関しては異なる場合があることを示唆している。

ここで、本稿の4節では、「VI ([大男からの逃走])」における、登場人物の行為に見られる、「ボヌンカヨ①」と「ボヌンカヨ②」での食い違いに関しては、本稿の7節において、交差対句との関連から述べたい。」と書いた。「ボヌンカヨ①」の場合は、長女が「林」を生じさせる行為と次女が「山」を生じさせる行為に関して、浅井は対比させた。そのため、対応という観点では、三女は何も生じさせる必要がなくなる。一方、「ボヌンカヨ②」の場合は、正反対の要素どうしを対応させようとする浅井の意図(おそらくは無意識下による)により、長女と次女が生じさせた「林」と三女が生じさせた「川」および「大男」が落される「川」が対比されたものと思われる。ここで、「林」は「火」を象徴し、「川」

は「水」を象徴すると筆者は解釈した。「火」では、「大男」は殺されず、「水」によって殺された。同様に、「大男」は、「林」は容易にすり抜けたのだが、「川」は渡れない。

8. まとめ

本稿では、浅井による2編のトゥイタ⁶である「ポヌンカヨ①」と「ポヌンカヨ②」を、ストーリー展開と交差対句に基づいて分析した。その結果、初録分である「ポヌンカヨ①」は、再録分である「ポヌンカヨ②」に比べ、ストーリー展開と交差対句による構成の両面において、詳細かつ緻密な構造であった。一方、交差対句を構築する上での対応の種類に関しては、「ポヌンカヨ①」は、類似要素どうしによる対応の割合が大きいのに対し、「ポヌンカヨ②」の場合は、正反対の要素どうしによる対応が頻用されていた。さらに、ここでの対応の種類の違いは、ストーリー展開における登場人物の行動の食い違いとして表出していた。換言すれば、本稿で得られた知見の一つは、ストーリー展開をもたらす因子(α)と交差対句をもたらす因子(β)が、2編の「ポヌンカヨ」の場合も、互いに独立して作用したことを示すものである。なお、2編の「ポヌンカヨ」に見出された、他の箇所における表現上の差異(揺れ)に関しては、今後検討する予定である。また、筆者としては、浅井の他の同話に関しても調査するつもりである。

併せて、本稿では、(α)および(β)に関する、北海道アイヌの口承テキストを題材とした大喜多(2013a)の知見が、本稿における樺太アイヌの口承テキストでも適用できた。このことは、北海道および樺太アイヌの心性における共通性を示す一例である。この件についても今後さらに調査を進める予定である。

引用文献

- 大喜多紀明, 2011, 「「アイヌ神話」の修辭パターンから心意を辿る(上) — 「交差対句」を糸口として — 『西郊民俗』, 217号, 24-32, 西郊民俗談話会
- 大喜多紀明, 2012a, 「アイヌ女性叙事詩「スズメの酒盛り」についての考察—交差対句と心意—」『アジア民族文化研究』, 11号, 181-213, アジア民族文化学会
- 大喜多紀明, 2012b, 「パナンベ・ペナンベ民譚にみられる対称表現と調和(上)」『西郊民俗』, 221号, 19-23, 西郊民俗談話会
- 大喜多紀明, 2013a, 「上田トシを話者としたアイヌの散文説話「カラスに育てられた男の物語」についての考察：ストーリー展開と交差対句の対比」『ポリグロシア』, 25巻, 95-106, 立命館アジア太平洋研究センター
- 大喜多紀明, 2013b, 「アイヌ口承テキストに確認される2種類の修辭配列パターンについての資料」『人間生活文化研究』, 23号, 77-96, 大妻女子大学人間生活文化研究所
- 大喜多紀明, 2013c, 「樺太アイヌの「トゥイタ」に見出せる交差対句について」『年報人類学研究』, 3号, 169-191, 南山大学人類学研究所
- 大喜多紀明, 2013d, 「樺太アイヌの口承文芸における語りの構造—浅井タケのトゥイタ、「カラスと娘」の場合—」『知床博物館研究報告』, 36号, 斜里町立知床博物館(印刷中)
- 大林太良, 1979, 「異郷訪問譚の構造」『口承文藝研究』, 2号, 1-9, 日本口承文藝學會
- 奥田純己, 1990, 「アイヌ口承文芸(1): 上田トシさん口演「カラスに育てられた男の物語」」『札幌学院大学人文学会紀要』, 47号, 169-200, 札幌学院大学
- 丹菊逸治, 2012, 「サハリン島アイヌ民族の「三人きょうだい譚」の成立仮説: ニヴフ民族の「三人の獵師」からの影響」『口承文藝研究』, 35号, 67-76, 日本口承文藝學會
- 知里真志保, 1981, 『アイヌ民譚集』, 岩波書店
- 伴野有市郎, 1991, 「続・戦後間もない頃録音されたカラフト・アイヌの歌謡—NHK制作の準長時間SPレコード(録音資料)」『参考書誌研究』, 39号, 84-86, 国立国会図書館
- 村崎恭子, 2012, 「話者の絶えた樺太アイヌ語: その終焉と再生の可能性」『社会言語科学』, 14巻2号, 3-16, 社会言語科学会
- 村崎恭子, 2013, 「樺太アイヌ語研究におけるB.ピウスツキ蠟管再生の功績」『「ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事: 白老における記念碑の序幕に寄せて」研究会報告集』, 55-60, 北海道ポーランド文化協会・北海道大学スラブ研究センター
- 村崎恭子(編訳), 作成日 2009-01-07, 更新日 2011-10-03, 『浅井タケ昔話全集 I, II』(音声・文字資料), 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 依田千百子, 1982, 「韓国の異郷訪問譚の構造」『口承文藝研究』, 5号, 47-57, 日本口承文藝學會

